

# JACT

Spring 2007, No.8

日本代替・相補・伝統医療連合会議

Japanese Association for  
Alternative,  
Complementary and  
Traditional Medicine

A Three-man Talk

新春鼎談「統合医療の時代をつくる」

綿貫民輔 vs 中條高德 vs 渥美和彦

Dialogue

対談「“こころの故郷”になるような療養型病院を目指したい」

桜十字病院理事長 東京大学名誉教授

西川通子 vs 渥美和彦

Special Feature

兄弟ドクター対談「健康づくりに温泉療法を生かせ」

北海道大学名誉教授 東京女子医科大学名誉教授

阿岸祐幸 vs 阿岸鉄三

# 世界から孤立する わが国の漢方医学



慶應義塾大学医学部  
漢方医学講座助教授

渡辺賢治

本年5月にカナダのエドモントンで「北米相補・統合医療リサーチカンファレンス」が開催され、参加してきた。その詳細は日本統合医療学会誌3号に掲載されている。

この学会には、全世界22カ国から1000人近い研究者が参集したが、残念ながら漢方の発表はわれわれのグループからのみで、日本からの参加者は渥美和彦理事長を含めて数名であった。

この学会は臨床経験ではなく、研究ベースで相補・統合医療を理解しようというものである。発表は最新のテクノロジーを駆使しており、ジーンチップ、プロテインチップは当たり前、瞑想の効果に対してはファンクショナルMRIを用いた研究発表など、真摯な態度で研究している姿勢がよく分かる。伝統医学の研究レベルも5年前とは隔世の感がある。

この発表のために要した研究費が一体、如何ほどのものになるのか、下衆な想像を巡らしてみただけでもすごい額になる。米国NCCAM(国立相補代替医療センター)からも15名くらい参加しており、CAMの推進に力を入れていたが、NCCAMの活動方針は、今まで統合医療に関心のなかった近代科学ばりばりの研究者に助成金を附与することで、この領域の研究レベルをアップさせようというものである。

実際、統合医療の研究に使われる予算は年々増加しており、NIHの中のNCCAMだけで年間予算150億円ほどだが、国立がんセンター(NCI)などの他のNIH機関でのCAMの予算を総計すると300億円以上にもなる。如何に米国がこの領域に深い関心を寄せているかが分かる。

しかしながら、海外では中医学または韓医学

を知っている、漢方医学を知っている有識者は少ない。世界中で伝統医学に対する関心が高まる中、このようなことでいいのであろうか？ 中国、韓国は政府と学術団体がしっかりとスクラムを組んで将来戦略を持って進めているのに対し、わが国は政府の支援も弱く、世界からの孤立感を深めている。

その原因の一つとして、日本国内では漢方薬は医療用にもなっており、相補医療ではなく、正規医療の一部である、との主張のもと、こうした相補・統合医療の学会には出向かないという風潮がある。その主張はもっともなのだが、海外でこのように非常に高いレベルの研究が為されているのに、世界の動向を見ざる、聞かざる、言わざる、でいいのであろうか？ 漢方がわが国の正規医療の一部であるという主張をするのであれば、国内ではなく、積極的に海外でその事を喧伝して行くべきではなからうか？ 世界の急速な変化から孤立して、情報から取り残されたその先には、一体、どのような将来像が存在するのであろうか？

カナダのエドモントンでの会議の続きで International Congress on Complementary Medicine Research が2007年5月11～13日にドイツのミュンヘンで開催される。まずはこちらから世界に飛び出して行くことが重要ではなからうか。

①

わたなべ けんじ◎1984年慶應義塾大学医学部卒業後、内科学教室に入局。足利赤十字病院内科での研修を経て、1988年より慶應義塾大学医学部内科学教室助手、1990年東海大学医学部免疫学教室助手。1991年より、米国スタンフォード大学遺伝学教室、スタンフォードリサーチインスティテュート分子細胞学教室ポスドクトラルフェロー。1995年北里研究所東洋医学総合研究所。2001年より慶應義塾大学医学部東洋医学講座(現漢方医学講座)助教授。